

### 新潟市新津鉄道資料館を再生する

金山, 喜昭

---

(出版者 / Publisher)

法政大学資格課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学資格課程年報 / 法政大学資格課程年報

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

2013-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014088>

# 新潟市新津鉄道資料館を再生する

法政大学キャリアデザイン学部教授 金山喜昭

## はじめに

筆者は、平成 22 年（2010 年）4 月から新潟市の文化施設のあり方を見直すことや、その再生に関する仕事に携わっている。これまでに、新潟市美術館（新潟市美術館の評価及び改革に関する委員会）、西蒲区・秋葉区の各文化施設の運営のあり方を見直すこと（新潟市文化施設のあり方アドバイザー）を手掛けた。

平成 23 年（2011 年）10 月からは、新津鉄道資料館活性化検討委員会の委員として、新潟市新津鉄道資料館の再生に取り組んでいる。幸いなことに、新潟市長の理解と市職員の努力により、約 1 年余りの期間に同館の再生に向けた方向性とそのための事前準備をほぼ終えることができた。それは、新潟市新津鉄道資料館活性化基本計画（案）（平成 24 年（2012 年）12 月）として公表された<sup>（註1）</sup>。

これまでの主な流れは次の通りである。実に迅速に再生のための準備が進んできたことが分かる。

- |        |      |                                      |
|--------|------|--------------------------------------|
| 2012 年 | 7 月  | 新津鉄道資料館活性化検討委員会スタート                  |
|        | 10 月 | 検討委員会が新津鉄道資料館活性化基本計画に向けた提言書を市長に提出する。 |
|        | 11 月 | 提言書をHP等で一般公開する。                      |
|        | 12 月 | 同計画（案）をパブリックコメントに出す。                 |
| 2013 年 | 1 月  | 新津鉄道資料館活性化基本計画（案）策定する                |
|        | 2 月  | 市長が補正を含めた予算案を市議会に提案する。               |

今後は、2013 年 3 月の市議会でも予算案が可決されれば、同年 3 月から基本計画・実施設計に入り、リニューアル工事などを開始して、2014 年 7 月にはリニューアルオープンする予定になっている。

そこで、本稿は、これまでの作業を振り返り、筆者

なりに改めて同館を再生する意義などについて述べることにする。なお、そのために『新津鉄道資料館活性化基本計画に向けた提言書』<sup>（註2）</sup>と『新津鉄道資料館活性化基本計画（案）』にもとづくことにする。

## 1. 全国の鉄道博物館における新潟市新津鉄道資料館の位置づけ

新津鉄道資料館は、現在の東日本旅客鉄道株式会社（JR）新津車両製作所の敷地内に旧国鉄の施設を利用し、昭和 58 年（1983 年）に開館した。展示品は、静態保存車両を含めて 2,000 点を超える資料を展示・公開した。しかし、資料館は施設の老朽化に伴い、平成 10 年（1998 年）、国鉄時代から職員の訓練施設として使用されてきた旧新潟鉄道学園に移転した。この際、静態保存車両は JR に返却されたものの、移転に合わせて多くの市民から資料の提供を受け、現在は約 8,600 点にのぼるコレクションを収蔵・展示している（写真 1～6）。

国内の「鉄道博物館」<sup>（註3）</sup>として抽出した 61 館のうち、新潟市新津鉄道資料館を次のように位置づけることができる（図 1）。

図 1-1 は、他の鉄道博物館をあわせた開設年代を示す。鉄道博物館の開設は、60 年代以降、増加する傾向にあり 2000 年代がピークとなっている（2010 年代は途中）。新津鉄道資料館が開館した 1980 年代と移転した 90 年代は、全国的にも増加する時期に重なっている。

図 1-2 に示すように、運営者の状況をみると、市町村が最も多い。新津鉄道資料館も、当初は旧新潟市であったが、その後の合併により現在は新潟市が運営している。

コレクションについてみると、新津鉄道資料館のコレクション数は約 8,600 点である。鉄道博物館の中ではコレクション数が多い館である（図 1-3）。しかし、図 1-4 に示すように、コレクション数が多い割に年間入館者数は多いとはいえない。



写真1 新津鉄道資料館の外観

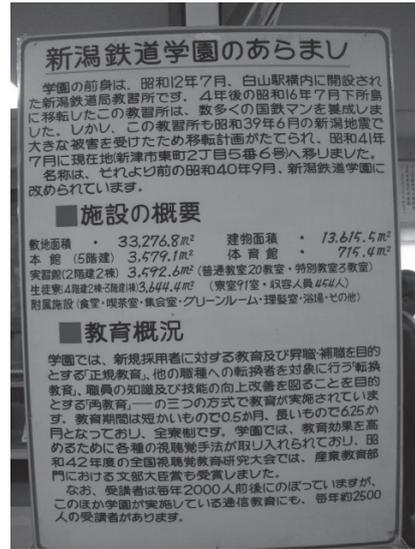


写真2 資料館は旧国鉄の新潟鉄道学園の施設を活用する



写真3 展示室の現状1



写真4 展示室の現状2



写真5 展示室の現状3



写真6 屋外の展示物

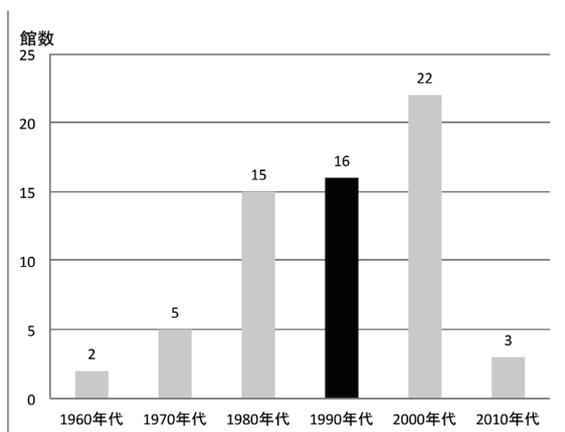


図1-1 鉄道博物館の開設年代

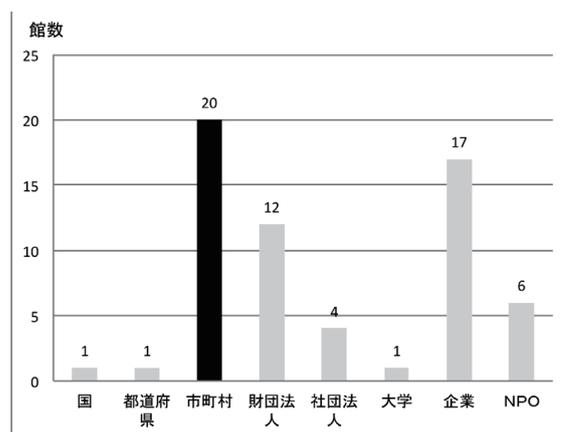


図1-2 鉄道博物館の運営者

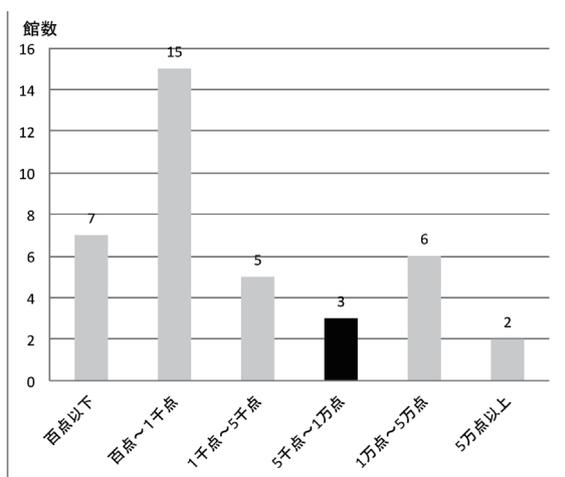


図1-3 鉄道博物館のコレクション数

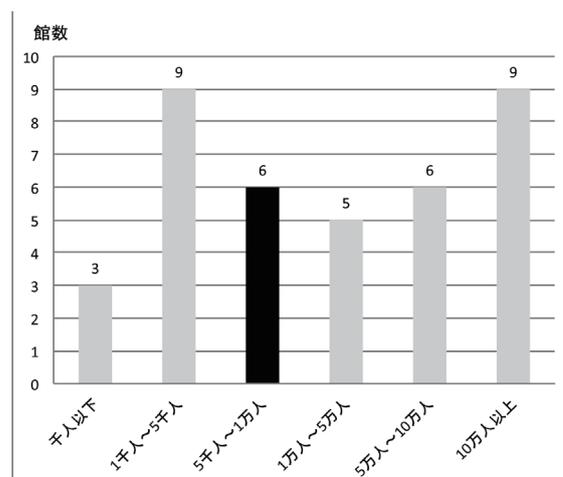


図1-4 鉄道博物館の年間入館者数

## 2. 第1ステップ：新潟市が新津鉄道資料館を再生させることを判断する

新潟市は、平成17年（2005年）に広域市町村による合併を行った際に、旧市町村で管理・運営していた地域の文化施設を引き継いで管理している。当館は旧新津市当時の運営や管理の状態のままになっていた。

平成23年度に文化政策課は、合併以前の市町村の文化施設やまちづくり活動に関する現状を把握しその課題について整理することにした。そのために、秋葉区・西蒲区をモデル区に選定し、各区役所と共同で、各施設等に関わる住民や区役所等職員合同の「ワークショップ」を実施した。ワークショップにおいては、参加者から各々の文化施設等の現状の洗い出しや、各区内の文化施設の今後のあり方、そして、「自らの文化施設、そして地域の活性化をどのように図っていくべきか」について検討した。筆者はそのアドバイザーになり、ワークショップのコーディネーターも担当した。秋葉区では、本稿で扱う鉄道資料館を含めた4施設（新津鉄道資料館、石油の世界館、新津美術館、小須戸町屋）を対象にし、その結果は既に報告書としてまとめられている<sup>(註4)</sup>。

その後、秋葉区の重点施設として、「鉄道資料館の再生」をテーマに取り上げて、市職員を中心に新津鉄道

資料館職員検討会を開催し、資料館の課題の再整理や今後の運営などについて意見交換をした。筆者が座長となり、元交通博物館学芸員の佐藤美智男氏などからも専門家としてのコメントをいただいた。

平成23年12月には、これらを取りまとめ、文化政策課は市長に対して、秋葉区の文化施設のあり方検討結果の報告と併せ、新津鉄道資料館の再生の方向性について報告を行った。その作業の流れは次の通りである。

- 平成23年
- 7月28日 金山アドバイザーと文化政策課職員による秋葉区内施設の現地確認を実施
  - 8月8日 秋葉区における文化施設のあり方検討第1回ワークショップ  
テーマ「わがマチの文化施設を良くするために」  
参加者：20人（市民13人、職員7人）
  - 8月22日 秋葉区における文化施設のあり方検討第2回ワークショップ  
テーマ「わがマチの文化施設を紹介します」参加者：19人（市民13人、職員6人）
  - 8月29日 秋葉区における文化施設のあり方検討 第

	3回ワークショップ テーマ「文化や文化施設との連携をさぐる」 参加者：19人（市民12人、職員7人）
9月5日	秋葉区における文化施設のあり方検討第4回ワークショップ テーマ「文化施設を運営する行動計画を作ろう」 参加者：20人（市民13人、職員7人）
10月24日	第1回新津鉄道資料館職員検討会 検討内容「資料館の運営のあり方について 他」 参加者：15名（市職員）
11月25日	第2回職員検討会 検討内容：「資料館をより良いものにしていくために 他」 座長：金山アドバイザー 参加者：13名（市職員）
12月28日	第3回職員検討会 検討内容「資料館の改善・活性化について 他」 参加者：15名（市職員）
同日	鉄道資料館を再生するため検討されてきた、秋葉区における文化施設のあり方検討、また職員検討会の検討結果の報告と合わせ、鉄道資料館をより具体的に再生していくために検討を進める組織（この

たびの本検討委員会）を設けることについて、市長へ報告し協議を行う（文化政策課、金山アドバイザー）。

以上が第1ステップの概要である。その要点は、次のように整理することができる。

- ① 新潟市が合併した旧町村の文化施設を再検討するというスタンスをもっていること。全国の多くの自治体は、旧町村の文化施設を役所の一方的な判断で廃館や休館にして合理化することが多い。しかし、新潟市の場合は、専門家の指導のもとに住民を入れてワークショップ形式で意見を出し合い、その結果を旧市町村の文化施設の現状や課題として公開した。新津鉄道資料館についてのワークショップの意見を表1に示す。
- ② 筆者がアドバイザーとなり市役所の担当課（文化政策課）が、鉄道資料館を見直しのための重点施設に位置付けて、鉄道に関心や関わりをもつ地元の区役所職員（旧新津市）との意見交換の場を設ける（表2）。一方、施設や運営のあり方を検証するために、専門家による現地調査とその評価をしてもらう（表3）。
- ③ ①と②の結果などを踏まえて、筆者と担当課長、所管する部長が市長に新津鉄道資料館を再生させることを具体的に検討するための組織の立ち上げについて報告・協議する（筆者同席）。

表1 市民と市職員による現状評価

評価者	秋葉区における文化施設あり方検討会ワークショップ参加者
意見 改善提案等	<p><b>1. 良い点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・展示が見やすい</li> <li>・「行き先表示板」など実際に使用された実物が数多くあり展示数は充実している。</li> <li>・通常の地域の文化施設とは異なり、産業から生じた独特の文化を対象にしている。</li> <li>・新潟交通や蒲原鉄道など廃止されているが歴史的で貴重な資料がたくさんある。</li> <li>・展示が近く見やすいし、触れられる。</li> <li>・記念切符や銘板など貴重な品物が多い。</li> <li>・マニア受けするし、品物にまつわる話を聞くと案外おもしろい。</li> <li>・鉄道博物館にない貴重な資料がある。</li> <li>・秋葉区には電車を製作する工場がある。</li> <li>・昔から二大鉄道の町は新津と米原が有名。</li> <li>・新津周辺では活きたSLに接することができる。</li> <li>・鉄道に関する事項をすぐに知ることができる。</li> <li>・説明が詳しい。</li> <li>・入館料が安い。</li> </ul> <p><b>2. 悪い点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・動きのある展示品が少ない。</li> <li>・子供達が興味を持ってそうな展示品が少ない。</li> <li>・操作、体験できる展示や資料が少ない。</li> <li>・多目的に利用できる場所が無い</li> </ul>

意見 改善提案等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エアコンが少ない、夏暑く、冬寒い。</li> <li>・駅から遠いうえわかりづらい場所にある。・交通アクセスが不便、もっと便利にしたほうが良い。・「鉄道」だけに駅に近いほうが良いのではないか</li> </ul> <p><b>3. 資料館としてのミッション（使命）の方向</b> 「市民に喜ばれる資料館に」</p> <p><b>4. 新津鉄道資料館としての課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コレクションは充実しているが、全点の把握（データベース化）が不十分である。</li> <li>・施設管理をする臨時職員と鉄道友の会との連携がない。</li> <li>・新津のまちなか（商工会議所、商店街）、J R 東日本との連携が弱い。</li> <li>・個別地域との結びつきが少ない。</li> <li>・古い年代の資料展示で高齢者層には好評だが、新しい切り口の展示がなく、若年層にはアピールできない。</li> <li>・学校の社会教育には有効であっても、外から訪れてもらう施設としての継続性に結びついていない。</li> </ul> <p><b>5. 対応策</b></p> <p>①短期の対応策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自主事業費を予算化して、新たな事業展開で、アピールを図っていく。</li> <li>・台帳、資料整理を行うとともに、作業に伴う人員の確保も視野にいれる。</li> <li>・協働で事業を実施できる組織作りが必要である。</li> <li>・J R などの協力を得て、新たな収蔵品の確保と展示内容の見直し、展示のコンセプトづくりを進めていく必要がある。</li> </ul> <p>②中長期の対応策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入館料の無料化も検討する。</li> <li>・全国の鉄道文化施設との連携や共同事業などを行うことで、魅力の向上に努める。</li> <li>・まちなかと資料館の活性化のため、新津駅前に「サテライト施設」を設置する。</li> </ul>
-------------	--

表2 市職員（旧新津市）による現状評価

評価者	新津鉄道資料館職員検討会
意見 改善提案等	<p><b>1. 課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろ案はあるが、それをこなせる「知識を持つ人材がいない」</li> <li>・地元から歓迎されている施設ではないようだ【地元との共生】</li> <li>・情報発信力の不足</li> <li>・展示物が豊富な一方、現施設が手狭</li> <li>・収蔵品台帳はある一方、「寄付品」と「寄託品」が混在。</li> <li>・現在の展示内容は「動かない」「現物の車両がない」「古い」で魅力が弱い</li> <li>・館外における交流（市民、団体問わず）が不足している</li> <li>・資料館を支える組織を</li> <li>・もっと身近な展示を進める</li> <li>・広く資料の収集を</li> <li>・公共交通アクセスが非常に悪い</li> <li>・鉄道資料に関する「知識・人材に乏しい」・・・人材がいない現状</li> <li>・様々な面で「現場の改善」が必要</li> <li>・マニア向け or 一般、子ども向け、どちらの展示路線でいくか</li> <li>・展示物だけでは、鉄道博物館や交通科学館にかなわない。それをどう使っていたかを語ることによって、「鉄道のまち」のオリジナリティを出すか。</li> <li>・現物の車両が1両もないのはさみしい。かつて走っていた車両が1つでもあると印象が違ってくる。</li> <li>・展示が古い（SL時代からの展示があるが、新しいものは昭和50年代で止まっている。）</li> </ul>

意見 改善提案等	<p><b>2. 方向</b></p> <p><b>【短期・明日からできること】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・さらなる情報発信（情報発信ブースの設置、他の施設と連携）</li> <li>・他のイベントとの連携強化</li> <li>・収蔵品を出来る限り「寄付」にすべき。「寄託」では館外での展示が制限されるなど、今後の十分な展開が図れない。</li> <li>・展示品の詳細な説明文を</li> <li>・小学校の総合学習への取り入れを。また、保育園や幼稚園の招待。</li> </ul> <p><b>【中期・1年以内】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新津駅を出てから資料館へ行きやすくする環境づくり（特定の日に無料バス？）</li> <li>・鉄道を通じた交流（鉄道にまつわる他市町村との交流、情報相互発信）</li> <li>・鉄道の歴史に関心を持ってもらい、鉄道のまちをもっと知ってもらう取り組みを</li> <li>・「鉄道資料館ガイド」の養成（資料館職員のみならず）</li> <li>・ガイド付きの館内案内（随時では大変なので、月に1～2回などと設定する。）</li> <li>・「石油の世界館友の会」のような「友の会」の結成</li> <li>・身近な鉄道雑学的な紹介も（時刻表の変遷、一番距離の長い電車、高度にある駅）</li> <li>・市民などからの寄付を受け付ける体制を（品の見極め、受入可否判断は大変だが、オンラインの施設を目指すため幅広い資料収集を）</li> <li>・職員の配置（収蔵品点検、展示入替、資料収集には不可欠）</li> <li>・JRとの協力関係の構築＝資料館活性化には必要不可欠</li> <li>・他の鉄道に関する博物館・資料館とのネットワーク・連携づくり（借用などによる相互展示など）</li> <li>・展示を変更する（ストーリー性を持たせ、「鉄道のまち」が見えるように。鉄道の歴史、文化としての鉄道、生活に関わってきた鉄道、などゾーン設定など）</li> <li>・屋外展示の改善（ただ置きっぱなしの感がある。）</li> <li>・素晴らしい収蔵品があるものの、色あせないような展示方法が必要（蛍光灯→LEDなどへ）</li> <li>・年に数回（季節毎）にイベント開催（リピーター増につながる取り組みを）</li> <li>・新津駅前からの誘客強化を（新津駅前にサテライトはどうか）</li> <li>・新津駅のほか新潟駅などにも鉄道ブースを設置して、「資料館に行ってみよう！」という興味をひくPRを（＝JRとの協力関係の構築）</li> </ul> <p><b>【長期・3年以内】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・展示のリニューアル【マニア向け or 一般、子ども向けの企画・展示】 （例：体験型運転シミュレーター、ミニSL運転など。鉄道OBの解説付きで。）</li> <li>・交通アクセスの改善（区バスの現路線変更など、新津駅前からの誘客）</li> <li>・JR東日本新津車両製作所などの協力を仰ぎ、電車の技術革新を取り入れた展示を</li> </ul>
-------------	--

表3 専門家による評価（1）

意見 改善提案等	<p>交通科学博物館（大阪市）課長・学芸員</p> <p><b>1. ファミリー層（お子様）に楽しんでいただく</b></p> <p>未就学～小学生くらいの年齢層では、部品・用具の見学や、解説パネルを読むことにより、学習したり、感心したりということはあまり見られない。「乗り物」の形が分かる実物車両や模型、動きに変化が出る可動式の展示装置を好んでいる。</p> <p>当館におけるこの年齢層の動向は、模型の見学や、体験・体感型展示で人気が集中している。（実物の運転台、運転シミュレーター、クイズ、ゲーム、模型運転 など）</p> <p>《改善策》</p> <p><b>1) 解説パネルの改善</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文字量の工夫。</li> <li>・お子様に読みやすいパネル構成を心がける。</li> </ul> <p>（文章表現の工夫、ルビ、イラストや写真の多様、文字の大きさや読みやすいフォント、パネルを設置する高さを考慮。）</p>
-------------	--

意見  
改善提案等

## 2) 模型等の増設

- ・車両模型展示コーナーを設ける。もしくは、展示に模型を多用する。
- ・模型に触れられる。動かすことができる。
- ・鉄道パノラマは、情報や情景にこだわるより、車両にバラエティーをもたせる。特に身近な車両や、(上越)新幹線などは、鉄道を知らない親御さんでも分かりやすいので車両について子供との会話ができる。楽しめる。

## 3) 展示場

- ・テーマをしぼる。(展示品数の整理)
- ・導線を設け、鉄道になじみのない方に配慮する。
- ・各展示品において見学者に何を伝えたいかを明確にして展示を構成。

## 2. オリジナル性のある資料館づくり

### 1) 地域性を持たせた展示

新潟や新津など、ここでしか見られない地域性の高い展示を資料館のメイン展示とすることで、鉄道好きな方はもちろん、そうでない方でも、新潟観光のひとつのスポットとして興味を持ちやすい展示を目指す。

また、地域の学校教育との連携を図り、鉄道技術とともに栄えた「鉄道のまち・新津」の郷土史を学ぶことができる教育の場として活用(社会見学、校外学習など)していただく。

キーワード

「鉄道のまち・新津」「鉄道学園」「雪とたたかう」「赤谷線」「蒲原鉄道・新潟交通」など

### 2) 各種イベントの開催

サークル、クラブ、同好会、鉄道OB、新潟支社、工場などにご協力いただき、各種イベントを定期的に行う。イベントを通して、多くの方に資料館に来ていただくとともに、世間に対して話題を提供することにより広く資料館を知っていただく。

- ・鉄道模型の運転会
- ・ミニSL運転会
- ・同好会など研究発表の場
- ・鉄道施設ウラ側見学会 工場見学会
- ・会合の場として使っていただく など

### 3. 現在の展示場について(懸念事項)

#### 1) 資料の劣化

展示中の資料について、日光や室内照明によるものと考えられる、色の退色が見られた。特に、紙資料類、記念切符類が顕著である(写真も懸念される)。退色は日々進行するため出来るだけ早期の対処が必要。

#### 《改善策》

退色の主な原因は、太陽光や照明から出る紫外線と考えられている。

- ・窓については、カーテンを閉める。もしくは紫外線をカットできるフィルム等を貼る。
- ・照明については、LED照明(紫外線が出ない)に変更する。もしくは、展示用(紫外線が出ない)の蛍光灯を用いる。
- ・光が資料に当たる時間を少なくするため、展示する資料の数を減らし、定期的に資料を入れ替える。
- ・レプリカ(複製)を用いる。

#### 2) 盗難の問題

お客様のモラルの問題が一番挙げられるので難しい事柄。しかしながら、博物館・資料館の展示資料は一点一点が各自「ストーリー」を持っており代替品が存在しないため、セキュリティー面で特段の配慮が必要。

#### 《改善策》

- ・注意書を展示場に貼る。
- ・鍵つきの展示ケースの導入など、展示ケースの整備を行い、大型や重量展示物以外はケース内展示とする。また大型展示等についても柵やアクリルパネル等で「バリア」を作ることも一考である。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・巡回を強化する。(資料に異常がないか点検する)</li> <li>・ダミーでも構わないので、防犯カメラ、もしくは警報装置等を増設する。 (防犯カメラは録画機能をつける)</li> <li>・展示点数を減らす。(点検を容易にするため など)</li> <li>・定期的に展示替えを行う。</li> </ul> <p><b>4. 「寄託資料」について</b></p> <p>「寄託資料」での資料館運営は、今後も難しくなることが予想される。盗難や破損・汚損となった場合の所有者への対応が挙げられる。また、他館等への貸出し、資料の補修や複製の製作などが必要となった場合は、所有者へ許可を頂かなければならないので、緊急時などのスムーズな対応が難しい。さらに、所有者の意向により資料を返還する義務が生じる状態は、資料を適切な状態で保存し、散逸を防ぎ、後世に伝えるという役割を有する資料館や博物館の資料管理上適切でないと考えられる。</p> <p>円滑な資料館運営のためにも、「寄託」による運営をご検討いただいたほうが良いと思われる。</p>
--	--

表4 専門家による評価(2)

評価者	元交通博物館学芸員
意見 改善提案等	<p><b>1. 資料館まで</b></p> <p>①駅から遠い。道中も単調なので、2キロ歩くのはきつい。歩くのが楽しい道(道中)ならば可能か。</p> <p>②駅からの行き方がわかりにくい。案内所も閉まっていて無人。バス乗り場が離れていて、時刻や運転間隔が不明。</p> <p><b>2. 資料館の印象</b></p> <p>①鉄道に縁がある建物だが、外観の魅力と期待感に乏しい。</p> <p>②収蔵資料の種類と数量は豊富。専門的なものから一般的(当たり前)なものまでの部品や用具があって、魅力と価値がある。</p> <p>③展示と保存の面では、資料を生かせていない。もったいない。見せ方の工夫が必要。</p> <p>④資料や解説板・パネルなど全般に劣化が目立つ(特に退色)。資料は保存上、心配。</p> <p>⑤展示構成は一応大分類され、整頓されているが、系統・順序立っていないため、どのように見に行ったらいいか迷う。</p> <p>⑥資料に解説がないものがある。</p> <p>⑦図書室には基礎的な蔵書がある。「新潟支社報」は貴重。</p> <p>⑧資料登録は予想以上に整理されているが、細目情報が不足(使用年代、使用箇所、用途、使用方法など)。</p> <p>⑨屋外展示品は雪のため劣化が目立つ(金属製も木製も)。将来も心配。</p> <p>⑩特別展会場スペースなし。</p> <p>⑪経費不足と、専従者・専門職員不足の印象。</p> <p>⑫館付近に飲食の場所なし(休憩をとりたい場合)。</p> <p>⑬資料館の他に、近辺や周囲に魅力・関心があるものがないと、一般客(外部の人)は来にくいし、リピーターにはならない(特に女性)。</p> <p><b>3. 現状での改良</b></p> <p>①全体的な化粧直し。</p> <p>②博物館用照明(無紫外線)の導入。</p> <p>③展示方法の整備。例えばディーゼルエンジンは枕木で支えるのではなく、実物に近いような台枠に吊るす。</p> <p>④実物車両がほしい。</p> <p>⑤日本鉄道保存協会年次総会の誘致。</p> <p>⑥シャトルバスの運行があるとよい。</p> <p>⑦例えばトイレを汽車便所の変遷にして、レプリカで過去からからの便器を並べ、実際に使用してもらおう(話題性として)。</p>

	<p><b>4. 今後</b></p> <p>①駅前の新館は望ましい。旧0番線までを屋根で組み込んで、実物車両を保存する。</p> <p>②新潟固有のテーマ「雪」（防雪、除雪など）について充実する。</p> <p>③名称と内容を“新潟鉄道資料館”に拡大してはどうか。市と県の合同施設にするあり方は可能か。</p> <p>④これからは本物の時代。豊富な資料を生かして、“生きた鉄道知識の博物館”“実物で見る鉄道学習図鑑”を目指してはどうか。鉄道博物館とは違って、鉄道基礎知識の展示を充実させる（レール、線路標識、道具、プレート類、保線などの分野）。</p> <p>⑤駅前にある神尾弁当部を活かせないか（ミニ駅弁博物館など）。</p> <p>⑥一時的なイベントではない、街自体の魅力の増加も必要。</p> <p>⑦昭和40年代の駅と町を再現。“昭和40年村”はどうか。</p> <p><b>5. その他</b></p> <p>①新潟（新津）は鉄道の車種が多いから、鉄道好きには魅力ある土地。</p> <p>②博物館施設で黒字化は困難。グッズ類の売り上げは高が知っている。</p> <p>③経費を出し、経費を出し続ける意志が市にあるかどうか。</p> <p>④他の自治体の取り組みとして、長浜（黒壁ガラス館）、伊勢（おかげ横丁）、青梅（レトロタウン）、丸瀬布（森林鉄道機関車の運転）などの状況。</p> <p>⑤JRは乗客増につながればのってくる可能性あり。</p> <p>⑥鉄道博物館を参考にはするが、新津の独自性を。</p>
--	---

### 3. 第2ステップ：検討委員会を設置するために市役所との調整をはかる

当初、市役所の担当課は、新たに配置した担当者を中心にして作業を進めることとし、筆者ら専門家を助言者として位置づけるように想定していた。しかし、そのように小さい組織体制でスタートすれば、出来上がりは、こじんまりとしたものになることは目に見えていた。担当課もそのことは分かっていたはずである。やるからには、鉄道資料館再生の必要性について市民への理解をはかるとともに、市長から了解を得て、役所内部でも再生計画やその裏付けとなる必要な予算を確保できるようにしなければならない。そのためには、担当課を中心に進めるのではなく、合議体として検討会を設置することが必要である。その方が対外的にも役所の内部的にも通りがよくなる。つまり仕事を進める上で、それにふさわしい形を整えることである。

そこで課長と協議をした。制度上、正式な検討会にするためには条例設置が必要であり、公募委員を入れることや、委員の人選や考え方についても議会に説明しなければならない。仮に、その手続きをすることも半年ほどかかる。もっと実用的な手法はないかと問答したところ、課長から「懇話会」という形式が適切ではないかという提案があった。これは条例設置でなく、要綱設置による。懇話会でも、例えば「検討委員会」という名称にして、委員の議論をまとめて「提言」を出すこともできる。制度的に、会議の公開、提言案の一般公開などはしなければならないが、それは支障になることではない。こうした課長の知恵により、懇話会形式による「新潟鉄道資料館活性化検討委員会」というお膳立てができることになった。検討委員会のメ

ンバーは、筆者の他に鉄道専門家（元交通博物館学芸員）の佐藤美智男氏、展示専門家（南山大学講師）の里見親幸氏、市民（30代主婦）の4名。提言書の作成まで僅か5ヶ月間であったが、会合は10回以上に及び濃密な議論をすることができた。

また、事務局は歴史文化課になる。歴史文化課は、市内の文化施設（新潟市歴史博物館、埋蔵文化財センターなど）を所管している。但し、それまでの準備段階では、文化政策課が担当してきたために、歴史文化課に全てをバトンタッチするわけにいかない。両者が連携することを不可欠のこととして、常に両課の意思疎通をはかりながら進めることにした。担当者は、新潟鉄道資料館職員検討会に参加していた地元の秋葉区役所職員が、人事異動して「新潟鉄道資料館担当」（平成24年4月付）となった。地元の職員は、人的なネットワークがあることや、何よりも再生に熱意をもって取り組む姿勢があつてよいからである。

### 4. 第3ステップ：新潟鉄道資料館活性化検討委員会による検討

そこで検討委員会は、提言書の作成に向けて検討を行った。

検討委員会での検討について、「誰が」（Who）、「誰に」（Whom）、「何を」（What）、「いつ」（When）、「どこで」（Where）、「なぜ」（Why）、「どのようにして」（How）、「いくらで」（How much）という基本項目に分けて再整理してみることにする。

#### (1) 誰が鉄道資料館を再生するのか

これまでは公民館の職員が兼務で管理し、臨時職員

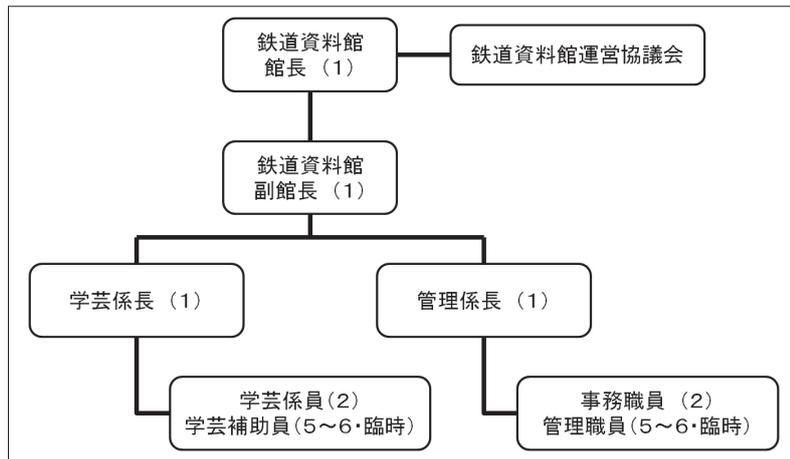


図2 新潟鉄道資料館の新しい組織体制

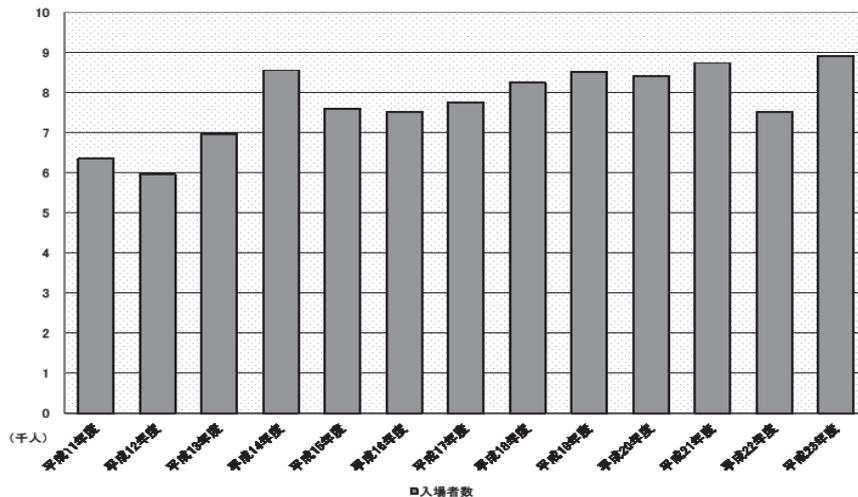


図3 来館者数の推移

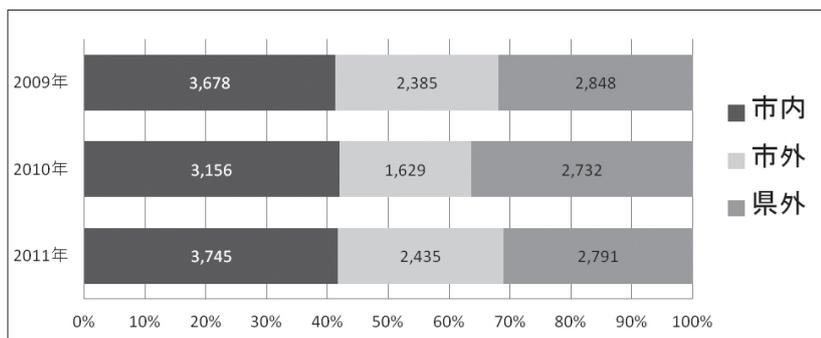


図4 新潟市内と市外・県外の来館者数の割合 (2009～2011年)

4名は日替わりで1～2名が受付業務や来館者に説明していた。新体制は歴史文化課が所管する。図2のように、館長以下、副館長、学芸部門、管理部門を配置して、博物館としての組織体制に転換する。

新潟鉄道資料館の運営については、鉄道文化施設として目的達成のため、以下の体制と配慮をする。

- ・館長は非常勤でもかまわないが、鉄道分野に関する知見をもち、存在感のある方が望ましい。
- ・副館長は常勤とし、資料館全体の活性化に対応できる職員をあてる。
- ・学芸員は常勤とし、資料の収集・保管業務、さらに

は市民・JRなどのネットワークの構築や情報の収集や分析業務を担う。「鉄道」という専門的な分野であるため、業務を行いながら育成を図るなど、中・長期的な見地が求められる。

- ・事務職員は常勤とし、資料館の管理・運営・渉外・企画事業などの活性化に向けた事業を実施できる体制が必要である。
- ・管理職員は非常勤とし、資料館・サテライト施設の運営業務を行うため、鉄道分野での知識が豊富な人が望ましい。

## (2) 誰が鉄道資料館を再生するのか

これまでの新津鉄道資料館の来館者の状況を図3に示す。過去10年間は、ほぼ7000人～8000人台で推移している。図4は平成21年～23年度の新潟市内、新潟県内、県外の利用者の割合を示す。過去3年間をみると、市内は約4割である。次は県外者が約3割～4割、残り2割～3割は県内者である。これまでの県外の来館者には鉄道マニアが目立っていた。博物館のコレクションは専門性を有することからいけば、鉄道マニアはそれを評価するサポーターにもなる。一方、市内でも特に地元新津の小学生の約2割は鉄道資料館の存在を知らず、約4割が訪れた経験がない<sup>(註5)</sup>というように、小学生の認知度が低くなっていることが課題である。

すると対象者は、大きく区分すると3通りになる。

- ① 地元新津や新潟市内の人たち。
- ② 全国の鉄道マニア。
- ③ 市外の鉄道に関心のある一般の人たち。②ほどの関心度は高くないが「鉄道好きの人」。

## (3) これまでの鉄道資料館に比べて「何を」をするか

これまでの鉄道資料館は、明確なミッションをもち、ハコモノとしての管理施設になっていた。コレクションは充実していながら、博物館としての基礎機能である資料の収集や整理は乏しく、展示ストーリーは不明瞭で、一般の来館者には理解しにくいことなどが課題となっていた。教育普及事業もほとんど行われることはなかった。また、鉄道系の博物館は全国で60館以上にのぼるが、館同士の連携や情報交換もなく、内向きの孤立した存在であった。

ミッションは、資料館がハコモノから脱却して、ひとつの機関としての働きをするための基軸となる。そこで、ミッション(案)を次のようにした。

- ① 交流人口の拡大と地域の活性化を図ります：  
新津鉄道資料館を、新潟市独自の「文化施設」として再生し、その魅力を内外に発信することで、人々が集い、交流する中から地域の活性化を目指します。
- ② 鉄道文化の発信拠点にします：  
鉄道のまちの“記憶”を再発見するとともに、最新技術を含めた新たな資料を収集し、わかりやすい展示を行いながら、新津をはじめとした鉄道文化の魅力を発信します。
- ③ 人づくりと地域の連携による事業を展開します：  
鉄道文化を継承・発展する人づくりと地域・市民・企業との連携により、魅力ある事業の展開を図ります。

もちろん、こうしたミッションは博物館の基礎的機能である、資料の収集、整理保管、調査研究の活動によって裏付けられる。

## (4) いつ開館するのか

開館は、2014年4月に部分オープン、7月に完成オープンを予定している。

元々、新津は「鉄道のまち」といわれることから、今後の資料館はJRとの連携を強化していくことが課題である。2014年4月～6月に新潟デスティネーションキャンペーン(DC)が新潟県で予定されている。デスティネーションキャンペーンとは、地方自治体と観光関係者がJRグループと合同で実施する大型観光キャンペーンのことである。

鉄道資料館のリニューアルオープンをそのタイミングに合わせることで、資料館とJRとの風通しを図っていく。また、地元新津の人たちにとっても、キャンペーンによる宣伝効果が期待できる。

## (5) どこなのか

現在の鉄道資料館の場所や建物を再利用する。地元住民の一部には、駅前移転を望む声もあった。その理由は、地元商店街の振興策にすることが狙いであったようだ。

しかし、市長は、当初の計画にないことに巨額の財政をつけることはできないと判断した。合併の際に地元からは文化会館の建設を要望されたからだ。同館は平成25年度中に完成する予定である。

そこで市長は、現状の施設を質的に充実させて、鉄道資料館を駅前に移転させる話は将来の課題にすることにした。まずはこれまでの資料館よりも充実をはかり市民がどのようにコミットメントするのかを見守ることにした。

現在地は、国鉄時代に職員の訓練施設として使用された旧新潟鉄道学園の敷地である。施設も当時の建物を活用している。JR新津駅から約2キロあり公共交通の便がないことから交通アクセスは良いとはいえない。しかし全国の鉄道博物館には類例のないユニークな由来がある。それを利点として生かせばよい。

## (6) なぜ、ハコモノから再生させるのか

その理由は3つに大別される。

一つめは、鉄道の技術や歴史に関するコレクションを適正にマネジメントして公開することである。

専門家の指摘によりコレクションの価値は高いことが判明したことから、まずは未整理のコレクションを整理・登録して、それらを適切に保管する環境を整えることである。それができれば、地元で資料の提供を呼び掛けて、さらにコレクションを充実させてゆることができる。

これまでの常設展示は、展示意図が不明確であったために、コレクションが展示に有効活用されていなかった。そのために、展示コンセプトを再検討した上で、コレクションの価値を引き出すような展示構成につく

りかえることにする。鉄道マニアや関係者、地元の住民、市外の一般来館者にも、それぞれの水準に合わせて興味をもち理解を促していく。

二つめは、新潟市の文化創造の魅力づくりの一つとして位置付けて、外部に情報発信をする。これは地元の新津にとっても、そのブランド価値を高めることにつながる。

資料館の再生が地域経済にも少なからずは影響を及ぼす。そのために「鉄道のまち新津」であるという根拠を示すことが大切である。資料館を再生させることは、その根拠を内外にアピールすることになる。資料館はその存在として、新しい情報を継続的に発信して

いくことで、地域のブランド力を高めていくことができる。

三つめは、地元住民の文化活動と交流の拠点にする。また学校教育にとっては地域学習の教材として活用する。区役所・資料館と住民が協働する。住民は事業を通じた世代間の交流をはかり、運営にも関与する。地元の人たちが様々な形で関わることにより、地域コミュニティの拠点にすることができる。

### (7) どのようにして再生させるか

再生の手法は、ミッションを踏まえたうえで、それぞれのミッションを達成するための運営方針をたてる、

表5

新津鉄道資料館のミッション	運営方針	事業内容	
<p>《交流人口の拡大と地域の活性化を図ります》</p> <p>(1) 新津鉄道資料館を、新潟市独自の「文化施設」として再生し、その魅力を内外に発信することで、人々が集い、交流する中から地域の活性化を目指します。</p>	①快適に過ごせる施設づくりを行う	利用者サービスコーナーを設置する	
		キッズコーナーを設置する	
		空調設備の改善を行う	
		バリアフリー化を行う	
	②魅力ある交通アクセスの向上を図る	新津駅からの交通手段を確保する	
		新津駅付近の各種表示板等に資料館PRとアクセス表示を行う	
		主要幹線道路に誘導看板を設置する	
		ホームページの作成、ソーシャルネットワークを活用する	
	③鉄道文化の情報発信をする	鉄道雑誌掲載や市広報を活用し、マスコミの協力を得る	
		全国の鉄道文化施設との連携による効果的な情報を発信する	
		地元の人たちから「鉄道のまちにいつ」の情報を発信する	
		新津駅前にサテライト施設を設置する	
<p>《鉄道文化の発信拠点にします》</p> <p>(2) 鉄道のまちの“記憶”を再発見するとともに、最新技術を含めた新たな資料を収集し、わかりやすい展示を行いながら、新津をはじめとした鉄道文化の魅力を発信します。</p>	①鉄道の“記憶”をたどる	昭和の新津駅の再現展示を行う	
		新潟交通電鉄、蒲原鉄道など廃線になった私鉄資料の展示を行う	
		新津、新潟の鉄道の歴史と生活文化の展示を行う	
		鉄道の“記憶”となる鉄道資料の収集を進める	
	②魅力的なコンテンツづくりと展示を行う	シミュレーターを新規導入する	
		鉄道映像等の更新、新規導入をする	
		実車を展示する	
	③鉄道技術の紹介を行う	鉄道模型パノラマ展示を見直す	
		新津・新潟の鉄道資料を展示する	
	④鉄道文化に関心を持つ人々を新たに獲得していく	魅力ある特別展等を実施する	
		⑤効率的なマネジメントを行う	資料館の管理運営の体制づくりを行う
			施設運営予算を確保する
<p>《人づくりと地域の連携による事業を展開します》</p> <p>(3) 鉄道文化を継承・発展する人づくりと地域・市民・企業との連携により、魅力ある事業の展開を図ります。</p>	①鉄道文化を学ぶ学校教育を支援する	地域団体や鉄道関係団体の協力を得て事業を行う	
		学校教育における施設活用を支援する	
		学校授業等へ「出前鉄道資料館」を実施する	
	②地域・市民・企業・鉄道文化施設などとの連携を強化する	地域文化と鉄道文化の浸透を図り文化の継承と人づくりを推進する	
		まちなかに「鉄道」をキーワードにした仕掛けづくりを行う	
	③鉄道文化と地域文化を担うひとづくりを行う	商店街、市民のおもてなし活動を行う	
		地元市民による鉄道シティガイド（仮称）設置への支援と連携を行う	
		地域の鉄道関係者による「新津鉄道資料館サポーター（仮称）」発足への支援と連携を行う	

さらにそれらを具体的な事業によって実現をはかる。その考え方については、表5に示す。そのなかでも主要な再生手段は次の通りである。

#### 展示リニューアル

- 豊富な実物資料を活かして、「鉄道のまち」としての新潟市、新津の歴史を紹介する展示を行うことで、鉄道のまちとして最も栄えた時代の新津駅の様子を再現し、鉄道と地域の歴史をたどっていく。
- 鉄道の実物資料について、役割や仕組みを詳しく分かりやすく説明を添えて展示する。同種の資料が複数ある場合でも、収蔵展示の手法も併用し、できるだけ多くの資料を常時展示するなど、メリハリのある展示を行うべきである。
- 映像や体験型装置の更新・新規導入により、子どもから大人まで、五感を通して鉄道を体感できる展示を行う。
- 来館者の興味や知識の深度に合わせた情報を提供できるように、多彩な展示解説の仕組みを備えていく。
- 常設展示のほか特定のテーマについて詳しく取り上げた企画展を開催する。

#### 施設リニューアル

展示リニューアルに合わせ、来館者が快適に観覧できる施設づくりを行わなければならない。現施設の課題に基づき、次のように施設リニューアルを図るべきである。

##### ○設備

- 館内の冷暖房施設が不十分で、夏は暑く、冬は寒い。観覧環境が不十分であることから、空調設備の改修を図る。
- 一般的な照明器具の使用は、作品の管理の長期的視点から、作品の劣化を進行させるだけである。作品の展示に耐えうる照明機材の導入を進める。

##### ○建築

- 職員が常駐する事務所を1階に設置し、バックヤードを設ける。
- 新たに2階部分を活用し、資料収蔵庫や常設展示、企画・特別展示が出来るゾーンを設ける。

#### 教育普及事業

- 学校教育との連携を重視し、わかりやすく、楽しく学んでもらえる利用しやすい展示や教育普及プログラムを実現する。
- 学校や生涯学習施設などへの出前授業を実施する。

#### 情報発信事業

- 館独自のインターネットホームページを開設し、SNSやツイッターなどを活用するなどして本資料館を含む周辺施設全体の魅力発信を行う。

- 広く鉄道文化に関する情報発信を行う。

#### 利用者サービス

- ショップ、カフェ、休憩機能、インフォメーション機能などの設置を行う。
- 親子が鉄道に親しみながら安全に遊べる施設づくりを行う。

#### 他館との連携

- 資料の貸借、特別展示の共同企画などの連携の促進を図る。

#### 地域ネットワーク

- 地元商店街や地域住民に対して、「鉄道のまち」としての誇りを醸成し地域活性化に向けた活動への参画のきっかけとなるよう、普及・啓発プログラムを協働で企画・実施する。
- 駅や商店街、近郊の文化施設など、地域全体を本資料館の活動フィールドととらえ、地域住民、地域団体、鉄道関係団体、民間企業などと連携した活動を展開する。
- 鉄道をテーマに、地域全体で取り組むプロジェクトを開催する。
- 市民による（仮称）「鉄道シティガイド」を育成し、活用を図る。
- 市民をはじめとする鉄道ファンを対象に、（仮称）「新津鉄道資料館サポーター」の制度を設ける。

#### 新津駅前サテライト

現在の鉄道資料館の位置は、新津駅から離れており、駅からは、自動車又は路線バスでの移動がメインとなり、駅から徒歩での移動は非常に厳しい環境にある。

また、新津駅は「鉄道のまち新津」を象徴する大切な機関であり、駅、そして駅周辺と一体となった鉄道のまちづくり、そして来訪者への鉄道資料館への誘導を図っていくことが、双方の発展・活性化には必要不可欠である。そこで、新津駅前サテライトを、新津駅を起点とした新津鉄道資料館へ来訪者を誘導するための導入拠点として整備するとともに、「鉄道のまち新津」のアピールを進めていく。（図5）

(1) 総合案内所機能としての役割を持たせる。

- 交通アクセスや交通機関の情報提供、レンタサイクルの貸し出しを行う。
- 地域の観光や施設、JR等と連携したイベント情報の提供を行う。

(2) イントロダクション展示を実施する。

- 常設展示のダイジェスト展示を行う。
- 企画展示のダイジェスト展示を行う。

(3) シティガイドの拠点づくりを行う。

(4) 附属施設として駅前に鉄道ポケットパーク（新津

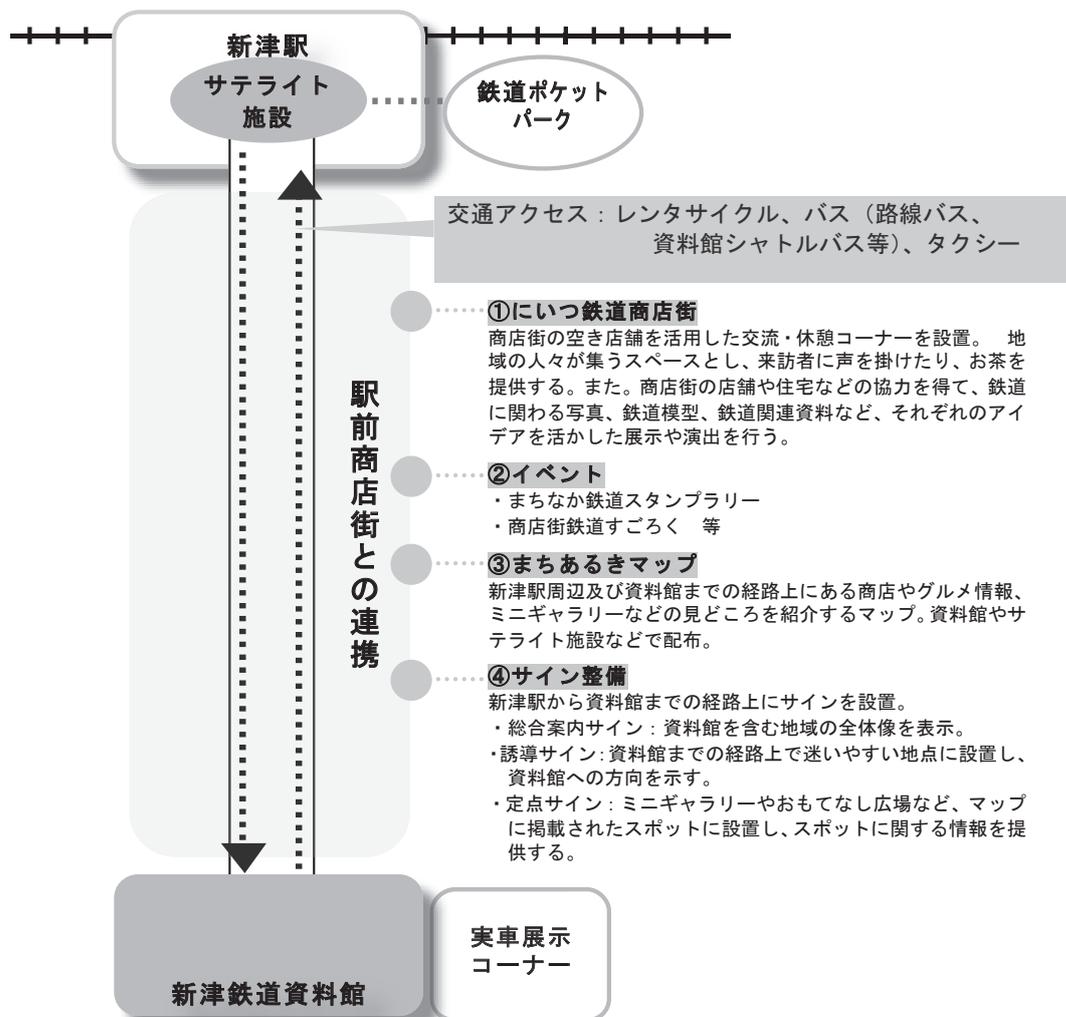


図5 駅前サテライト施設の構想イメージ

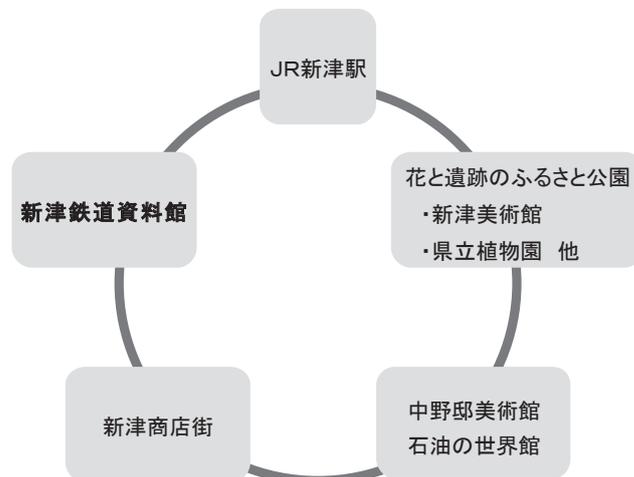


図6 文化施設間のネットワークイメージ

駅前公有地での鉄道資料展示)を設置する。

### 他館とのネットワーク

秋葉区には鉄道資料館のほかに、石油の世界館、中野邸美術館、さらには、新津美術館、県立植物園、県埋蔵文化財センター、史跡古津八幡山弥生の丘展示館や、花と遺跡のふるさと公園など文化施設の集積ゾー

ンとなっている。

これまで秋葉区内の文化施設を利用する人たち（域外からのJR利用者）にとっては、公共交通がほとんどないのが現状であり、このアクセスの不便さは、自家用車以外では域外からの利用者にとっては大きな障害となっている。

それを解消するために、新津駅から鉄道資料館や各

文化施設を巡回するシャトルバスなど、例えば多くの利用者が見込まれる春から秋季の土・日・祝日に（1時間間隔で）運行するなど、対策を講じることが考えられる（図6）。

#### （8）いくらで再生するのか

リニューアルにかかる経費の予算（平成25年度）は、展示改修等設計業務、展示改修等業務、実車輸送・展示業務、駅前サテライト開設・運營業務、空調設備工事、事務費等（非常勤人件費除く）の計271,171千円である。

### 5. 今後のスケジュールを確認する

先述の資料館リニューアルについては、市として、今後の活性化基本計画の策定、リニューアル基本設計・実施設計の策定を経て、必要な工事・展示業務を行う。同時に、鉄道資料館の展示の核ともなる、新たな資料・情報の収集も、並行して作業を進める。

これらを踏まえ、次のとおり鉄道資料館のリニューアルオープンのスケジュールが想定される。

平成25年度

- リニューアル基本設計・実施設計の策定（平成25年度前期）
  - 展示リニューアル業務（平成25年度中期～。館内施設リニューアル工事を含む。）
- ※期間中、鉄道資料館は閉館とする。

平成26年度

- 鉄道資料館リニューアルオープン（平成26年度中期）
- 平成26年4月に部分オープン、7月に完成オープンを予定している。

#### おわりに

以上、新津鉄道資料館の再生事業は、当初の予想を超えてスピード感をもち、充実した内容にすることができた。最後に、それを可能にしたそのポイントを整理しておくことにしたい。

- ① まずは、事前に市民や関係職員とのワークショップを行い資料館の現状とその評価をしたことである。この作業は、これまで市役所主導の行政ではなく、住民が地元の文化施設のあり方を主体的に考える契機になった。また市職員にとっても、ハコモノ化した施設を見直すことに自分たちも参加できることで、当事者意識をもつことになった。
- ② 地域住民、そしてかつての旧新津市職員にとって鉄道は地域の誇りにもなっている。現在の秋葉区役所から適任者を担当課に異動させて鉄道資料館のリニューアル係の担当者に配置したことである。持ち前の行動力で地元のネットワークを生かして、さまざまな現場の課題を解決していくことに成功した。特に実物車両の手当をしたことや、駅前サテライトの選定地の確保については、担当者の働きに負うと

表6 今後のスケジュール

作業内容	24年度	25年度			26年度	
	後期	前期	中期	後期	前期	中期
基本計画策定	→					
リニューアル 基本設計 実施設計		→				
リニューアル 展示業務			資料館閉館		→	
リニューアル オープン					→	オープニング事業

ころが大きい。

- ③ 担当課が主導するのではなく検討委員会を設置して専門家を配置したことである。要綱設置の懇談会形式による検討委員会にすることで、役所内の発言力を確保することができた。これは課長の知恵によるころが大きい。その結果、その後を作成した基本計画に対して必要な予算を確保する見通しを立てることができた。
- ④ 専門家にコレクションの評価を依頼した。検討委員会のメンバーにも専門家がいるものの、さらに他の鉄道博物館の専門家にも視ていただいた。複数の専門家の方が、より客観的な評価を得られるし、参考になる意見も多かった。
- ⑤ 検討委員会のメンバー構成がよかった。私のほかに、展示デザイン、鉄道博物館、市民の30代主婦というように、それぞれの分野から多くの建設的な意見が寄せられて、鉄道資料館を再生させるために同じベクトルに向くことができた。
- ⑥ そして何よりも、市長との意思疎通を図りながら進行できたことが大きい。事前に検討委員会を立ち上げる時点、検討委員会の提言書を市長に提出するなど、ステップごとに筆者が担当課とともに市長に面会して確認を取りながら作業を進めることができた。

なお、最後に、本稿の作成については、新潟市文化政策課、同歴史文化課にご協力いただいた。記して感謝申し上げる。

(註)

(1) 新潟市『新潟鉄道資料館活性化基本計画(案)』2012

<http://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/shimin/pulic/publiccomment/bunkasport/rekishibunka/nt-pc.html>

(2) 新潟鉄道資料館活性化検討委員会『新潟鉄道資料館活性化基本計画に向けた提言書』2012

[http://www.city.niigata.lg.jp/shisei/gyoseiunei/fuzokukikan/sonota/bunka\\_sport/rekishibunka/n-tetsudou.files/teigensho1.pdf](http://www.city.niigata.lg.jp/shisei/gyoseiunei/fuzokukikan/sonota/bunka_sport/rekishibunka/n-tetsudou.files/teigensho1.pdf)

(3) 本稿では、鉄道に関する科学館、公園、資料館、記念館などを鉄道博物館と総称する。

(4) 新潟市文化観光・スポーツ部文化政策課『文化施設のあり方検討 秋葉区報告書』2012

<http://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/bunkagyousei/arikata-kentou.html>

(5) 新潟日報、平成24年5月23日